

## 『天王寺屋会記』に登場する医師について

安井 広 迪

『天王寺屋会記』<sup>(注1)</sup>は、室町時代末期から安土桃山時代にかけて活躍した堺の豪商・天王寺屋津田宗達・宗及・宗凡三代にわたる茶会記録であり、全十六巻より成る。

この書は、千利休と同時代に、彼やその師武野紹鷗と親交のあった津田家の人々の手になる記録という点で、単に茶道史上極めて貴重なものであるにとどまらず、この時代全体を研究する上で重要な史料でもある。

この茶会記にはいろいろな人が登場する。津田家が居住の地としていた堺に於いて交友関係にあった人々はもちろんながら、織田信長、豊臣秀吉、松長久秀、明智光秀など、当時の政界の中心人物を始めとし、京の著名人の名もしばしば登場している。その中には、何人かの医師の名が見られる。

そこで、ここではこの茶会記に登場する医師について、若干の知見を加えつつ考察してみたい。

### 一、曲直瀬道三

初代曲直瀬道三(一五〇七～一五九四)がすぐれた茶人であったことは、すでに周知の事実である。彼は『山上宗二記』などにも見えるように、多くの名器(義輝より拝領の富士茄子、蓼冷汁天目、紹鷗花入、安井茶碗等々)を所持し、また千利休と談合して「三疊座敷」を構築したとされており、更に『茶湯一枚起請』を著わして、茶論にも深い見識を示したと言わ

れる。信長や秀吉など当時の要人に対しても、医師としてだけでなく、茶人として多くの交流を持ったようである。道三は『天王寺屋会記』に二回登場する。いずれも道三の主催する会に津田宗及が参加したものである。

最初は元龜二年（一五七二）二月二十日朝の茶会で、客は宗及と草部屋道設の二人であった。ここで道三は自慢の茶碗を見せている。よほど良い茶碗であったと見えて、宗及は巻六の道具拝見記でこの茶碗に詳しく論評を加えている。道三六十五才の時のことであった。

二度目はこれより二年後の天正元年（一五七三）九月十八日で、この日は道三は紫野道閑の座敷を借りて茶会を行っている。この会には千利休、山上宗二も同席している。

茶会記には他に二ヶ所、道三所持の茶碗について言及している部分がある。いずれも安井（野州井）茶碗についてであって、これは室町時代の京の人、野州井道龜の所持しているものである。

## 一、曲直瀬玄朔

玄朔の『天王寺屋会記』の初見は、天正九年（一五八二）十一月晦日の宗及自会記で、この時玄朔は弱冠三十三才であった。彼はこの年の一月八日に昇殿を許され、正親町天皇に謁している。また初代道三の孫娘を娶ったのもこの年である。あるいはそのようなこともあって、上流社会の一員として認められ、宗及の招きにあずかったのであろうか。

次は、天正十一年三月十五日に玄朔自らが茶会を開き、ここに宗及ほか三名の客が呼ばれている。ここで玄朔は、養父道三から借りてきた桃尻の花入を披露している。玄朔は三十五才で、この年の十一月十一日に勅旨により「道三」の号を襲名する。従ってここではまだ玄朔を名乗っているが、この前年の正月に法眼に叙せられているにもかかわらず、この部分では、「京の道三の玄朔会」とのみ記し、その位についてはふれていない。

その次は天正十二年十二月二十六日で、再び堺の宗及の自宅の茶会に呼ばれている。ここには「玄作道三法眼」とあ

り、彼が昇進したことを物語っている。

最後は天正十八年（一五九〇）十月十一日の宗凡の他会記で、こうり山の池田伊与の茶会に、宗凡と二人で呼ばれている。ここでの名称は、単に「道三法印」とあるので、初代道三か玄朔かはつきりしないが、この年初代道三は八十四才（彼はこの四年後に八十八才で没す）の高齢であり、ここでは玄朔とみるのが妥当であろう。なお、この日の主人、池田伊与というのは、羽柴秀長の家臣池田伊予守のことである。

### 三、曲直瀬守真

『寛政重修諸家譜』には、初代道三に一男子のあったことを記しており、その名を守真といったという。守真には後嗣がなく、早逝した為玄朔が養子に入って曲直瀬家を嗣いだことになっている。

ところで、宗及の他会記の天正十一年（一五八三）三月十八日の項に「道三のしゅしん会」とある。玄朔の例でもわかるように、「道三の」とことわってあるのは、道三の身内ということを表していると思われる。さすれば「しゅしん」は守真であろう。

道三が田代三喜のもとでの修業を終え、京都に帰って還俗し、医業を開始したのは一五四五年である。子を設けたのはその後であろう。一応そのように考えて計算してみると、守真は玄朔とあまり変わらない年齢で、この時三十〜三十五才ぐらいではなかったかと想像される。少なくとも、天正十一年まで彼は存命であったということは言えるであろう。

### 四、重泊

天正十二年（一五八四）正月九日の宗及自会記に「京の道三の弟子重泊」という人物が登場している。この人物が何者であるかは明らかではないが、ここではひとつの可能性を提示しておこう。

『今大路家記鈔』には道三の一人娘が浦野玄清という武士と結婚して二男四女を設けたことを記している。その長男の名を守柏といい、道三と同じ翠竹院を号したとされている。守柏は重泊と音が似ており、宗及が書き記すときにこの文字を使った可能性があるが、これは想像の域を出ない。

## 五、施薬院全宗

天正十一年三月十八日の宗及他会記に「薬師の徳雲軒会」とある。この徳雲軒は、曲直瀬道三の弟子丹波全宗のことである。全宗は丹波康頼の後裔であり、天正十三年、秀吉が施薬院を復活させた時にその長官（施薬院使）に任じられた。この茶会記録は、彼が六十五才の時のもので、まだ施薬院使として活躍を始める前であったが、秀吉側近の能吏、道三門下の俊秀ということで、相当の名士であったに違いない。

## 六、半井驢庵

驢庵という名称は、半井明親（？一五四七）が永正年中に渡明して武宗の病気を治し銅硯と驢馬をもらったことに由来している。以来、子孫は代々驢庵を称した。『天王寺屋会記』には「驢庵」として永禄八年（一五六五）二月二十三日（宗達他会記）に一度だけ登場する。この驢庵（驢庵）は、その年代からみて明親の嗣瑞策と考えられる。

この時の主人は津田宗閑。宗達の弟で、やはり堺の豪商の一人である。してみると、驢庵はこの時何らかの理由で京から堺に出てきていたのであろう。この当時、堺は南蛮貿易の中心地で、活発な人の往来があり、驢庵も物見遊山的な気分でやってきた可能性がある。しかし、たとえそうでなくとも、彼が少なくとも一回は来堺していることが他の資料から明らかになる。

当時の堺には驢庵（瑞策）の義兄弟にあたる宗洙が健在であり、その息の慶友（古仙法印・一五二二〜一六一五）が壮年を

迎えて大活躍の時期であった。彼の診療記録『半井古仙法印療治日記』は丁度この頃書かれたと考えられるが、その中の篠原長房の毒殺未遂例で、驢庵が堺まで来て診察したことが見える。長房が臥床していた時期が定かでないが、あるいは永禄八年、この茶会記の年のことであつたかも知れない。

### 七、半井宗洙（附 宗巴・慶友）

半井明親に菊芳という娘があり、この人は連歌師・牡丹花肖伯（一四四三〜一五二七）の子宗洙（？〜一五八三）と結婚した。もともと堺には半井家の別荘があり、利長以下、代々半井家の人々は堺に縁が深い。しかし、定住したのはこの宗洙が最初で、為に彼は堺半井家の中祖と言われる。

宗洙はこの茶会記に五回登場する。

永禄五年 六月二十二日 宗達他会記（道安会）

永禄八年 九月 十七日 宗達自会記

永禄九年 十一月十三日 宗及自会記

永禄十一年十一月十九日 宗及自会記

元龜三年 一月二十五日 宗及他会記（油屋常祐会）

これらの記録により、彼は市小路という、堺の比較的中心部に住んでいたことが判明する。また彼は五回のうち三回まで「宗玻」という人物と同道している。彼は同じく「くすし」であり、宗洙に極めて近い人物であつたと考えられる。

宗洙には二人の男子があつて、長男を慶友（古仙法印）、次男を宗巴といつた。「宗玻」をこの宗巴に同定すれば、会記の記載するところは極めて自然に見える。この会記では同音異字がしばしば用いられており、「宗洙」にしても「宗珠」となっていることもあり、このことにあまりこだわってはいない（なお、宗洙の曾孫に宗珠があり、まぎらわしい）。

ところで、元龜三年閏正月二十五日の油屋常祐会に慶祐という人物が同席している。これには「ケケウ」と注があり、これは「ケチウ」つまり家中の誤りとすれば、この慶祐は天王寺屋一族に極めて近い人物ということになる。宗及には二男一女があり、家業を嗣いだのは宗凡で、もう一人の男子宗琯は大徳寺第一五六世の江和尚である。女子を榮薫とい、この人は宗洙の孫（慶友古仙の子）云也に嫁した。

このように、津田家と半井家は極めて近い間柄にあり、その関係はすでに宗洙の代に始まっていたのであろう。さすれば、この「慶祐」こそ宗洙の嫡男、慶友その人ではないかと考えられる。もしそうであれば、慶友はこの時五十一才。堺在住の著名人を多数診療し、大いにその名をあげていた時期にあたる。

#### 八、竹田定加

天正八年（一五八〇）十二月十八日の宗及他会記（於京都・宮内法会）に竹田法眼の名が見える。この竹田は、室町時代に渡明してその名を知られる昌慶の子孫で、次の天正十年八月の宗及自会記に登場する「京の薬師竹田法印」と同一人物と思われる。この頃、京には竹田家の医師として定珪や宅致が健在であったが、『医学天正記』などにしばしば登場する竹田定加が、その活動を開始しつづつあった。この会記に登場する竹田氏は、この定加と思われる。彼は元龜二年に法眼となり、天正九年に法印に昇進している。従って天正八年の茶会では法眼であり、同十年では法印となっていることはその間の経緯を傍証するものであろう。

なお、堺にも竹田家の後裔があり、やはり医を業としていたが、こちらの方は「薬師院」と呼ばれていた。次に述べる。

#### 九、竹田薬師院（附 円礎）

この茶会記の中で、「薬師院」の名は、天文二十四年（一五五五）から永祿十三年（一五七〇）までの十六年間に七回登場

する。そのうち永祿八年四月の三回の宗達他会記の他は、全て薬師院の茶室で行われている。

一方、「円璣」の名は、永祿十二年五月二十三日の宗及自会記に「薬師の円璣」と記載されているのが初見である。その後約十年間は御無沙汰で、次は天正六年（一五七八）二月の宗及他会記（円璣会）で再び登場し、天正十一年五月までに六回参加の記録がある。

薬師院は堺の竹田氏で、その名称は昌慶の後裔昭慶の第二子、円俊<sup>(注3)</sup>（高定）に始まる。円俊は文亀三年（一五〇三）、御柏原天皇の病気を治療し、法印に叙せられ、薬師院の院号を賜った。彼とその子孫は堺に住し、代々竹田薬師院を名乗った。円俊高定の後は定快が嗣ぎ、その後は円璣定信、円璣隆品と続く。

『天王寺屋会記』に登場する可能性のあるのは、その活躍年代からみて、天文二十四年（彼のこの茶会記への初見の年）に法印になった竹田薬師院定快と、その子円璣定信<sup>(注4)</sup>である。「薬師院」と「円璣」が同一人物を指している可能性もないが、「薬師院」が一五七〇年を最後としてその名を消し、「円璣」が一五六九年を最初として活躍を開始しているのでは見る時、やはりこの二人は別人（親子）とみる方が妥当と思われる。

なお円璣定信の妻は、利休の茶道の師匠の一人として知られる北向道陳の娘であり、道陳には男子がなかったので、その没後に彼の遺産は全て女婿の円璣定信が相続したことが知られている。この茶会記で「北向円璣」と記されていることもあるのは、その為であろう。

以上のことから、「薬師院」は竹田薬師院定快であり、「円璣」はその子円璣定信であると考えられる。

以上、『天王寺屋会記』に登場する医師達について、若干の知見を述べた。登場人物はいずれも当時一流の医人達であり、医学史的な面から見た伝記は、すでに明らかになっている人が多い。

しかしながら、この茶会記の記録を見てわかることは、彼らが医家として一流であるばかりでなく、文化人としても第

一級の人々であったことである。中国の医書を読みこなし、それらを実践に移すにあたっては、相当の教養を必要としたに違いない。この茶会記に於ける彼等の活躍は、その好例を示すものであろう。そして、これらの交遊関係は更に彼等の活躍の場を広め、自らの医業に反映させていったものと思われる。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所)

注

注1

『天王寺屋会記』の構成は左図の如くである。本書は自筆本が現存し、それに基づいた活字版が、淡交社刊『茶道古典全集』第七・八巻に永島福太郎氏の注・解題と共に収録されている。本研究もこのテキストによった。

		他 会 記			自 会 記		
宗 凡	十四 天正一八	卷 二 天文一七—弘治二 四 弘治 三—永祿 九			卷 一 天文一七—弘治二 三 弘治 三—永祿 九		
宗	十二 天正一一—天正一五	五 永祿 八—天正 三	六 道具 拜見 記	七 永祿 九—天正 二	八 天正 二—天正 三	九 天正 三—天正 六 (馬越家旧蔵本)	十 天正 四—天正 五
宗	十三 天正一一—天正一五	十一 天正 一—天正 一〇	十二 天正 一—天正 一五	十三 天正 一—天正 一〇	十四 天正 一—天正 一〇	十五 天正 一—天正 一〇	十六 天正 一—天正 一〇

注2

永島福太郎氏の注によった。

注3

竹田薬師院家の始祖は、円俊高定であるが、その前後の家系があまり明らかでない。月舟寿桂の『幻雲文集』は、彼を竹田昭



慶の第二子と述べており、これが最も信頼できる。しかし、『堺市史』に記された「竹田薬師院由緒書」によれば、昭慶と円俊の間に堯慶なる人物が入っており、これがどのような人か、実在したことは確かであるが、他の史料からも判断できない。なお、田俊は『おゆどのの上の日記』に「ちくしじ」として盛んに登場するほか、他の同時代の史料にも散見される。前記『由緒書』によれば、彼は堺に居住したことになっているが、それがいつ頃のことか定かでない。

注 4 『竹田家譜』(京大富土川文庫蔵)によれば、田穂定信は竹田定白(定加の長男)の子となっている。しかし、これは時代的に合わないの、『家譜』に錯簡があるのでもさう。なお『由緒書』には、彼が豊臣秀吉の病気に際して功があり、堺の軸松町に屋敷を拝領したことが記みられている。

## Physicians described in the "Tennojiya-kaiki"

by

Hironichi YASUI

"Tennojiya-kaiki", written in the Azuchi Momoyama Period, details aspects of the tea ceremony as produced by three generations of Tsuda family tea ceremony masters. Famous figures of that time, such as Oda Nobunaga and Toyotomi Hideyoshi, are mentioned in this book. The names of several famous physicians also appear in it, and it is the insights which it gives to the activities of doctors with which I am concerned in this paper.

The family of Manase Dosan himself knew Sen-no Rikyu, and had in his possession some very valuable items used in the tea-ceremony.

Both the Nakarai and Takeda families, who produced many great doctors during that era, were actively involved in the world of the tea ceremony.

The practice of tea ceremony was considered a highly cultured past-time and was restricted

to members of the upper class. The physicians mentioned in "Tennojiya-kaiki" fell into his class, and this book reveals that it was around members of this group that the medical practices of these famous physicians evolved.

レソロコトク・スフ全巻  
レソロコトク・スフ全巻